

## 第149号

平成14年2月

E-mail: © 2002  
shimz@mb.infoweb.ne.jp  
LDG04167@nifty.ne.jp

## SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ  
横浜市緑区中山町 869-9  
電話 045-933-0379  
FAX 045-931-9202



14回め



立春を過ぎると確かに暖かい日が増えてくるから、暦はじつに上手く出来ている。庭にある梅の木が、ちょうど気持ちよさそうに薄桃色の蕾を膨らませ、ちらほらと咲き始めた。いつまで眺めていても飽きない。実に絶妙のバランスである。でも、今のエンジニア達は、季節の移りを感じる余裕はあるのだろうか。

「おはよう、マスター」  
と、しばらく顔を見せなかった客が入ってきた。  
「いらっしやい、しばらく振りだね」と、声を掛けられたもの・・・うーん、重いな。彼は、黙ってカウンターの奥の席に座って、灰皿を引き寄せる。真ん中に座らなかった。  
「今日は一人？」  
「いつもの彼は、月曜から休んじゃって」「風邪でも引いたの？」  
と言いながら、いつものブレンドコーヒーの準備に取り掛かる。  
「ダウしっちゃったみたい」  
「あら～、仕事のし過ぎかね？ 確か、3ヶ月程前に来たとき、要求仕様の書き方の話をしたっけ？」  
「マスター、良く覚えてるんですね。あのあと、会社の方針で、CMMの審査を受けるということになっちゃってね。そこでアセスメントが入ったんですよ」  
「なるほど、効果的にCMMに取り掛かろうというわけね」  
「そうなんです、いっぱい指摘されてしまいました・・・」  
「業務とCMMの両方で疲れが出たわけだ」といって、出来立てのコーヒーをカップに注いで、彼の前に滑らせた。

「でも、要求仕様の取り組みは出来ているのでしょうか？」  
「というと、バツの悪そうな顔をして、」  
「その前に、CMMの取り組みが来てしまったんですよ。だから、実際に要求仕様を書いてみるということが出来ていません」  
「とすると、見積りはどうした？ 計画書の中に入るよね」  
「はい、計画書でそのことが求められていますので、見積りは書いていますが・・・」  
と云って自信のない顔をしている。  
「サイズは見積もっていないのかな？」  
「いえ、一応書いていますが・・・」  
「殆ど根拠がないということね。それじゃ、体裁を整えているだけで、何の支援にもならないね。むしろ、時間が失われていくだけじゃないの？」  
「そうなんです、それで相棒もダウンしちゃったんです」

「今からでも、見積りのところをカバーしないと、どんどん悪くなるよ」

「やっぱり、そうですね」  
「ところで、工数見積りが出来るための前提条件って分かるかな？」  
「やっぱりサイズ見積りですよ」  
「そうだね。成果物のサイズを見積もらないと、工数は出てこないからね。で、どのような成果物を作ることになるか、はっきりしているの？」  
「要求仕様書とか、設計書とかいうのはリストに上がっています」  
「うーん、奥歯に何か挟まっているね。その成果物は、プロジェクトの中で使い道がはっきりイメージ出来ているのかな？」  
「使い道って？」  
「中間成果物は、それが後のプロセスで使われて価値が出るんだよ。作るプロセスは一つでも、それをいろいろんなプロセスで入力にしてくれることで、作り出した時間が回収できるわけだ。後の使い方を考えて成果物の構成や内容を決めておかないと、折角作っても、活用されない事になってしまう。揚げ句の果てには、後になって、また急にメモみたいなものを作って間に合わせることも成りかねないね」  
彼は、これに答える様子を見せないまま黙ってコーヒーを飲んでいる。どうやら凶星だ。

「どうやら、成果物が作りっ放しになっているようだね」  
「そういわれれば、作りっ放しなのかも知れませんがね。後の作業ではっきりと活用しているというでもないですね。でも、そんなもんだと思っていたのですが、違うんですか？」  
「なるほど、今までそのような状況を疑いもしなかったわけだ」  
「決められたドキュメントを作りながら作業を進めていけば良いのだと思っていたのですが」  
「まったく間違いというわけでは無いがね。そこであるドキュメントを作るのに、それまでに作ったドキュメントや、既にあるドキュメントを入力として使うよね」  
「はい、参考にしたりします」  
「たとえば、システム設計書は、その後のタスクの設計作業に対して、有効な情報を与えるはずで、最初からそれを狙ってシステム設計書を作るよね」

「そうか、マスターの言いたいことが分かってきたですよ！」  
どうやら、自分たちがこれまでやって来た作業に対して感じていた空疎な感覚の、出所らしいものに気がついたようだ。下唇を噛んで続けた。

「正直言って、システム設計書がタスク設計の前に書かれなければならないという認識はあったけど、その中のどの部分が、タスクを設計するという作業の入力になるのかと言うところまで考えたことはなかったです」

「結構、みんなそんな感じで作業をしているのかも知れないね」  
「システム設計書の入力は、要求仕様ですよ」  
「そうだけど」  
「僕ら、まだ要求仕様と言えるものは書けていないのかも知れないけど、実際には、沢山の項目が書かれますよね」  
「何を心配しているの？」  
と意地悪してみた。

彼は、何千もの仕様の項目を、システム設計でどう扱うのかイメージできないようだ。  
「いえ、あの山ほどある要求仕様の全ての項目を、システムを設計するというプロセスで、どう扱うのでしょうか」  
「やっぱり、そこで引っ掛かってたんだね。要求分析という中に“抽象化技術”というのがあったでしょう」  
「はい、見たことがあります。でも良く分らないままになっています」  
「“Abstract”と言えは分かるかな？」  
「要約するという意味ですよ。そうか、“抽象化”とうのは“Abstract ion”の事ですか。一杯ある要求項目の中で、システムを設計するのに必要な要件を抜き出すことですね」

「そういうことだね。ところで、新規開発で要求仕様を書くときに、これが、システム設計の入力になって、そこである基準に照らして“Abstract”されることが分かっているなら、それまでに、この仕様が難しいですよと印をつけておけば、システム設計作業は、スムーズに進むよね」  
「はい、そう思います。そのためには、要求仕様を書く人が“これって難しいから注意してね”ということでマークしておけばいいですね」

「そのとおり、でも、要求仕様を書く人が、それを判断出来なかったらどうする？ いつもそれを判断できる人が書くとは限らないからね」  
「その場合は、その後のレビューで、仕様の矛盾や衝突などをチェックする際に、厳しい仕様とか、パフォーマンスの制限がついている仕様とかに印をつけることは出来ると思います」  
「良いね。分かってきたようだね」  
「はい、中間成果物とプロセスを有機的に繋いだものがあればいいのですね」  
「そう、私はそれを“プロセスフローダイアグラム”と呼んで、全体のプロセスと成果物の関係を見せるために使ってきたんだね」  
「以前、見せてもらいましたよね。あれがあれば、役に立たない成果物を作らないで済みそうですね。プロジェクトで作る成果物の全体が見え、それを使えば、成果物のサイズ見積りにも展開出来そうですね」  
「今までのように、根拠もない見積りにならなくて済むでしょう」  
「何だか、元気ができたような気がします」  
「そうかい、そりゃ良かったね。君たちのような若い人に、しっかり活躍して貰わないと、日本はダメになるからね。頼むよ」  
と言うと、彼は私の顔を正面から見て笑った。

成果物とプロセスのきちんとした連鎖を作らなければ、無駄な作業が入り込んでしましうし、見積りも狂ってしまう。

# 暁鐘の音

132

## 時代の迷い子

高校卒業生の就職率が低い状態が続いている。「この問題は、関係者が連携して対応して欲しい」というのが政府のセリフだが、果たして、どう「連携」するのだろうか。この問題は、関係者が「ちょっと」連携したくらいで解決する問題ではないと思うが。

二〇世紀の終盤あたりから、日本の産業が、いわゆる製造業から知識産業へのシフトが迫られているのに対して、日本の初中等教育が依然として、製造業を指向したままになってきていることの歪みがある。今日の就職率の低迷とあって現れているのである。経済活動がグローバル化しているのに、教育が「国民経済」の仕組みを指向したままなのである。

時代は大きく変わっているのに、文部科学省(旧文部省)は、時代に合うように教育カリキュラムを変えてこなかった。「構造改革」という言葉が飛び交っても、それは政治や経済の世界のことであって、自分たち(教育)には関係のないでも思っていたのだから。不登校や学級崩壊という事態に対しても、それが、時代の変化のうねりに巻き込まれた子供たちの悲痛な叫びには聞こえなかったようだ。家庭の躰けの問題として片付けてきたし、揚げ句の果てには、教育内容の後退という時代と

授業の内容が殆ど理解できていないのに、登校日数だけで、勝手に進級していくことに生徒自身が戸惑っている。そのことに教育関係者は気付いていないのではない。ある程度の均質な労働力の供給が求められた時代では、それでも就職の機会は見いだせただろうが、知識産業への舵が切られた今日、それでは仕事に付けないことは中学生にも分かる。第一、大人が今になって仕事を失っているではないか。

は逆方向へ舵を切った。「知識産業へのシフト」という命題をどう解釈しているのか、疑いたくなる。自分の将来に対して希望を持っているという子供が、日本の場合、僅か二割ほどしかないというデータが出て、それは生徒個人の問題であって、自分たち(文部科学省の役人や教育関係者)には関係のないことでも思っているのだろうか。ちなみに、韓国や中国では、八割前後の子供たちが、自分の将来に希望を持っている。

確認した上で進級させるべきだというヨーロッパの一部の国で、履修状況を確認した上で進級させるべきだという議論が表面化している。EUが統合された結果、地域(国)の競争力が、一つの物差しで比較されるようになった。その時、「卒業資格」を持つていても、学力にバラつきがあったら、その地域への企業の進出の障害になってしまうという。

日本に於いては、アジアの小国と思われているベトナムでも、履修結果が悪ければ中学校に進めない制度になっているようである。そのため、小学校の校長は必死になって、教え方が上手な先生を集めるし、校長自身が、生徒が脱落しないように、対話の機会を増やしているという。先生の方も、教え方が上手であれば、仕事に就く機会が増える。その効果もあってか、最近はずいぶんベトナムへの投資が盛んに行われるようになってきている。

しかも子供たち本人が、これを求めている。というより、授業の内容を習得していないのに、進級するのはおかしいと、子供たち自身が認識している。それによって、彼らは、時代に立ち向かえんと実感しているのである。これを裏返せば、授業の内容が殆ど理解できないまま卒業できて、社会に出てやっていく自信が持てない、ということになる。これが、今の日本の状態でもある。

### 今月の一言

「孤独は、すべてのすぐれた人物に課せられた運命である」  
(ショーペンハウエル)

中国からの大量の留学生の受け入れという形で、一部の短大の無理な経営が問題となっているが、これも知識産業へのシフトが高学歴化をもたらした結果として「短大」が時代の波の中でその存在を問われているのである。これは、別に「短大」だけの問題ではない。四年制大学であっても、必要な知識を吸収しなかった学生は、卒業しても仕事にありつくことは難しいだろう。知識産業へのシフトは、学生に

逆に言えば、優れた人物は、孤独をうまく使っているとさえいえる。会社や政治の世界でトップになった人は、多くの「取り巻き」に囲まれ、次々とスケジュールをこなし、あつという間に一日が終わる。中には、床につく直前まで、支持者との談笑を殆ど毎日繰り返した首相もいる。孤独な時間よりも、ちやほやされる時間の方が楽しいのだろう。

して、高度な知識の習得を求めている。場合によっては、習得の時間が四年でも足りないということになっていくだろう。

追跡で一日を終わらせていると、次第に思考する力が失われていく。自己との対話が出来なくなり、自分を客観視することもできない。そして殆どの人は、自分がそのような状態に変わっていることに気付かない。

「孤独」をうまく活用できない人が会社のトップになったら、その会社の行き着く先は知れている。